

二次資料に収録された日本の水産化学に関する論文調査

誌名	日本農学図書館協議会会報
ISSN	03858081
著者名	平尾,慶子
発行元	日本農学図書館協議会
巻/号	22号
掲載ページ	p. 1-7
発行年月	1973年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



二次資料に収録された日本の 水産化学に関する論文調査

平尾慶子

科学の著しい発展に伴い、情報量が増大し求める情報の入手が困難になってきている今日、情報を含む文献の探索の手がかりとして二次資料の果たす役割は大きい。そして効率良い文献探索を行っていくうちに、各二次資料の有効性を知ることが、それらを利用する研究者自身にとっても図書館の側にとっても必要である。索引誌、抄録誌などの二次資料の有効性の評価には、判定の基準の一つとして、収録率タイムラグが用いられている。

そこで日本の水産化学の分野を選び、主な二次資料の収録範囲の調査を行なった。

I. 調査方法

調査を行なうにあたって基にしたのは「日本農学進歩年報第18号(1969)」所載の水産化学の217論文である。その内訳はA水産動物の化学-185論文(68年発表の論文が一つ含まれていたが、出版年統一のため除いた。)、B海藻の化学-32論文となっている。

調査対象とする tools は、水産学専門の二次資料と、包括的な二次資料の両方から、主なものを選んだ。実際に用いたものは、次に示すとおりである。

雑誌記事索引 科学技術編

20巻1号(Jan. 1969)~21巻12号
(Dec. 1970)

日本化学総覧

42巻10号(Jan. 1969)~45巻6号
(Sep. 1970)

Chemical Abstracts(C. A.)

Vol. 70 No1(Jan. 1969)~Vol.

74No26(Jun. 1971)

Biological Abstracts(B. A.)

Vol. 50 No1(Jan. 1969)~Vol.
52 No18(Jul. 1971)

World Fisheries Abstracts
(W. F. A.)

Vol. 20 No1(1969)~Vol. 22
No2(1971)

Current Bibliography for
Aquatic Sciences and
Fisheries(C. B. A. S. F.)

Vol. 12(1969)~Vol. 16(1971)

Commercial Fisheries Abstr-
acts

Vol. 22 No1(1969)~Vol. 24 No6
(1971)

具体的な方法としては、217論文の書誌的事項をカード化し、現物にあたって確認し、このカードを基にして、論文の著者名を手がかりにして二次資料に収録されているかどうかを調べた。

II. 調査結果および考察

調査結果をまとめたものが、第1表、第2表である。第1表は、雑誌別の収録状況であり、第2表は雑誌の刊行機関のグループ別の収録率である。

調査の基にした、「日本農学進歩年報」所載の論文の内訳をみると、学会誌がきわだつて多く、中でも「日本水産学会誌」の論文が半数近くを占めている。大学関係・国立試験研究機関の雑誌論文が、それぞれ全体の1割前後を占めており、国外・公立試験研究機関

第1表 二次資料に収録された日本の水産化学の論文数(1969年度)

誌名	総論文数				雑 索			日 化 総 覧			C			A		
	69	69	70	計	69	70	71	計	69	70	71	計	69	70	71	計
1. 広島大畜紀	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	
2. 北大水産業報	8	8	8	6	0	0	0	0	0	0	8	0	8	0	8	
3. 鹿児島大水紀	8	0	8	8	0	8	0	8	8	0	0	0	0	0	0	
4. 宮崎大農研報	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
5. 長崎大水研報	8	0	8	8	0	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	
6. 水産大校研報	8	8	0	8	2	0	0	2	2	0	0	0	2	2	0	2
7. Tohoku J. Agr. Res.	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	1	0	1	
I 大学計	20	6	11	17	2	6	0	8	2	5	0	7				
1. 国立栄養研報	5	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	
2. 南西区水研報	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
3. 淡水区水研報	4	0	4	4	0	8	0	8	0	0	0	0	0	0	0	
4. 東海区水研報	14	0	14	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
II 国立場所計	24	1	18	19	0	4	2	6	0	0	0	0	0	0	0	
1. 道立水研研報	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
2. 北海道水試報	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
3. 北水試月報	1	0	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	
4. 静岡水試研報	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
III 公立場所計	4	1	2	3	0	4	0	4	0	1	0	1	0	1	1	
1. Agr. Biol. Chem.	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1
2. Bull. Chem. Soc. Japan	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	
3. 動物学雑誌	5	4	0	4	2	1	0	8	0	2	0	2	0	2	2	
4. 栄養と食糧	6	6	0	6	5	1	0	6	5	1	0	6	5	1	0	6
5. 学術月報	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
6. 魚肉ソーセージ	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
7. 函館食科研刊	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
8. 発微生物学誌	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
9. J. Biochem.	12	10	0	10	5	4	0	9	9	8	0	12	9	8	0	12
10. 化学と生物	4	4	0	4	2	1	0	8	0	1	0	1	0	1	1	
11. 缶詰時報	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
12. New Food Industry	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
13. 日本化学雑誌	5	8	1	4	1	2	0	8	1	8	0	4	1	8	0	4
14. 日本農化会誌	6	6	0	6	0	5	0	5	1	5	0	6	1	5	0	6
15. 日本食品工誌	7	5	0	5	8	2	0	5	1	0	0	1	1	0	0	1
16. 日本水産学誌	71	66	5	71	87	22	0	59	14	29	0	48	14	29	0	48
17. Rec. Oceano W. Japan	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	
18. 冷凍	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
19. Sci. Rept. W. Res. Ind.	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2	2	
20. 生化学	2	2	0	2	1	1	0	2	0	2	0	2	0	2	2	
21. 食品衛生学誌	6	8	1	4	2	2	0	4	2	0	0	2	2	0	2	
22. 食品衛生研究	12	0	0	0	1	6	0	7	0	0	0	0	0	0	0	
23. 油化学	4	8	1	4	2	2	0	4	8	1	0	4	8	1	0	4
学会など計	165	114	9	128	62	52	0	114	86	52	0	88				
1. Comp. Biol. Phy.	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2. Toxicol.	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	1	2	0	3
国外計	4	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	1	2	0	3
総計	217	122	40	162	64	66	2	182	89	60	0	99				

注. 誌名は正式の略名ではない。6字以内に省略。

B			A	C F A		C B A S F		W F A		非收錄 論文數			
69	70	71	計	69	70	71	計	69	70	71	計		
0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	8	0	8	0	6	0	0	0	0	1	1	0	
0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	
0	12	0	12	0	7	0	7	0	0	0	1	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	2	2	0	0	1	1	0	0	1	1	0	
0	0	8	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	1	5	6	0	0	1	1	0	0	0	1	8	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
0	8	0	8	2	0	0	2	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	80	0	82	28	25	1	49	0	0	18	18	10	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0
0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
8	89	1	48	26	26	1	58	0	0	18	0	10	21
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
8	54	6	68	26	88	2	61	0	0	18	18	12	25

第2表 各二次資料における日本の水産科学に関する論文の収録状況

刊行機関	総論		雑 索		日 化		C A		B A		C F A		C B A F		W F A	
	文数	収録数	%	収録数	%	収録数	%	収録数	%	収録数	%	収録数	%	収録数	%	
大 学	20	17	85.0	8	40.0	7	35.0	12	60.0	7	35.0	0	0	1	5.0	
国立試験 研究機関	24	19	79.2	6	25.0	0	0	6	25.0	1	4.2	0	0	1	4.2	
公立試験 研究機関	4	3	75.0	4	100.0	1	25.0	0	0	0	0	0	0	0	0	
学会及びそ の他の機関	165	123	74.5	114	69.1	88	53.0	43	26.1	53	32.1	13	7.9	10	6.1	
国 外	4	0	0	0	0	8	75.0	2	50.0	0	0	0	0	0	0	
総 計	217	162	74.7	182	60.8	99	45.6	63	29.0	61	28.1	13	6.0	12	5.5	

※(213) ※(761) ※(620)

注※ ()内の数は、雑索を日化が国内発行の雑誌のみを扱っているため、その数で%を出した。

の雑誌論文は非常に少なくなっている。

この「日本農学進歩年報」は各年ごとに、農学関係の各分野別に、その研究動向のレビューを行ない、文献をリストしており、この分野のオリジナルな論文を網羅した、一応信頼のおけるものである。しかし、水産化学の研究論文は、このほかにもあることが考えられる。また、時間的制約もあるため、必ずしも十分なサンプル数とはなっていない。対象として選んだ七つの二次資料の中には、抄録誌、索引誌が含まれており、刊行頻度、toolsの規模等を異にしているため、まったく同じ条件のもとに比較することは困難である。こうしたことを考慮したうえで、調査結果の分析、考察を行なってゆきたい。

A. 雑誌記事索引 科学技術編

第1表から明らかなように、全体的に収録状況はよく、雑誌の刊行機関別にみると、その収録対象としていない国外のものを除くとどれも平均的に、70%以上の収録率を示している。

さらに雑誌別にみると、「国立栄養研究所研究報告」と「魚肉ソーセージ」、「食品衛生研究」の論文が、全く収録されていないことがめだつ。

索引がないことからくる調査もれ、および

発行の遅れが大きいため使えなかった、71年度のものに今後載ってくる可能性を考慮しておく必要があろう。

B. 日本化学総覧

雑誌記事索引に次いで、62%と比較的良好な収録率を示している。雑誌の刊行機関別にみると、大学のものが40%、国立試験研究機関のものが25%となっており、これらの収録率が良くない。これは配布の問題があるのか、あるいはJICSTが積極的に集めていないためかわからないが、そうしたことで低くなっていることが考えられる。索引の遅れが大きくこの調査では著者名索引を使うことができなかったため、調査もれを考慮しておく必要があるが、今後新たに収録されていく可能性は、タイムラグが比較的小さいことから、少ないと思われる。

雑誌別にみると、水産学の主要な雑誌と考えられる「北海道大学水産学部研究彙報」と「東海区水産研究所研究報告」の論文が、収録されていないことがめだっている。

C. Chemical Abstracts

外国の二次資料の中では最も収録率が高く45.6%となっている。雑誌の刊行機関別にみると、大学および、国立試験研究機関の雑誌論文の収録率が低いことが、第2表から明

らかである。学会その他の雑誌論文は約半数が収録されている。国外のものについては、基にした論文が4論文と少ないので、まったく同列に比較はできないが、一応8論文が収録されている。

大学や国公立試験研究機関の雑誌論文の収録が悪いのは、CAICに対する国内の協力者に、これらのものに目を通す人が少ないためではないかと思われる。また、CAの場合、国内の協力者は大学よりも一般の人が多いいわれ、そのことも関係しているのではないかと考えられる。

D. Biological Abstracts

BAの収録率は29.0%で、包括的な二次資料の中では最も収録が悪い。

雑誌の刊行機関別にみると、大学関係の雑誌論文が60%となっており、国外のものについても一応4論文中2論文が収録されている。その他の機関についてみると、概して収録率は低く、公立試験研究機関のものはまったく収録されていないという結果になっている。学会およびその他の機関の雑誌論文の収録率は、CAの半分にすぎない。

BAも、国内の協力者が抄録を送るシステムになっており、CAの場合とは逆に、大学にいる人が多いといわれ、そのことが関係しているということも考えられる。また、全体的に収録率が低いのは、BAの収録対象としての基準に合わないため収録されなかったということも考えられる。

E. Commercial Fisheries Abstracts

CFAの収録状況は、28.1%と低いが、水産学関係の三つの二次資料の中では最も良い結果を示している。

雑誌の刊行機関別にみると、大学関係と、学会その他の雑誌論文の収録率が比較的良好で雑誌別にみると、「北海道大学水産学部研究彙報」と「日本水産学会誌」の論文が集中的

に収録されており、その他の雑誌については気まぐれなひろい方がされている。

年間の収録件数が少なく、CAのように機械化の進んだ大規模なシステムではなく、せまい分野の抄録誌であることを考えると、CFAにおける収録状況はそれほど悪くない。

F. Current Bibliography for Aquatic Sciences and Fisheries

CBASFの収録状況は、わずか6%と非常に悪く、「日本水産学会誌」の論文が18収録されていたのみである。タイムラグが大きいため1971年後半以降に収録される可能性があるが、それを考慮してもCFAの数倍の収録件数を有する水産学関係の包括的な二次資料として悪い。

1972年からは、Aquatic Biology Abstractsと合併して、Aquatic Sciences and Fisheries Abstractsが創刊されるということでもっとスクリーニングを行なう雑誌の範囲を広げて日本の水産化学の文献の収録率を高めるようにしてもらいたい。

G. World Fisheries Abstracts

WFAの収録状況は、5.5%と一番低い。これはWFAが年間の収録件数が、世界の文献から約850件という現状で、規模の小さい抄録誌であることによる。言語上の問題などがあるにせよ、日本の文献がもう少し収録されて良いと思う。

H. 非収録論文率

以上述べてきた二次資料のどれにも収録されなかった論文についてみるためまとめたのが第3表である。

全体としてみると、217論文中、非収録論文は25で、11.5%という結果になっている。

雑誌の刊行機関別にみると、学会その他の非収録論文が21論文あり、非収録論文総数の84%を占めているのがめだつ。

第3表 非収録論文率

刊行機関	総論文数 A	非収録論文数 B	$\frac{B}{A} \times 100$	$\frac{B}{\sum B} \times 100$
大 学	20	0	0	0
国立試験機関	24	8	12.5	11.5
公立試験機関	4	0	0	0
学会及びその他の機関	165	21	12.7	84.0
国 外	4	1	25.0	3.8
総 計	217	25	11.5	10.0

第1表から雑誌別にその内訳をみると、「魚肉ソーセージ」の論文がまったく収録されていないことが注目される。そのほか「食品衛生研究」の5論文、「国立栄養研究所研究報告」の8論文が、非収録論文としてめだつ。

I 全体的考察

全体的にみて、比較的日本の二次資料における収録状況が良かったといえる。基にした論文が、日本のものであることから当然といえよう。また、水産学関係の二次資料よりも広範囲を対象とする二次資料のほうが収録率が高い。このことは水産化学という分野が、文献の分散している度合の大きい分野で、その論文が水産学関係の専門誌以外の雑誌に多く掲載されるということが大きな原因と思われる。

雑誌記事索引が最も高い収録率を示しているが、今後さらに収録率を高めるよう国立国会図書館の努力、雑誌編集者の協力を望む。

日本化学総覧は2番目に収録率が高く、60.8%となっているが、国内の化学文献を網羅的に集めた包括的な二次資料の収録率としてはあまり良くない。これは基にした「日本農学進歩年報」所載の論文のほうに原因があるということが考えられるので、その内容を検討してみた。佐々木氏の分析によると、基にした217論文の中87論文が、日本化学総覧に

収録されない可能性があるということである。その内訳は、保存4、物性5、微生物汚染7、鮮度5、中毒6、となっている。これらの論文が同年報で水産化学の項に掲載されるのは同年報がレビューを行なっているためである。ここでは論文の主題内容にわたる問題についてはこれ以上触れないが、こうしたことを考えあわせれば、日本化学総覧の収録率は悪くはない。JICSTには、さらに積極的な活動を行なって収録範囲を広げてもらいたい。

外国の二次資料ではCAが最も良い結果を示し、約半数を収録しており、ついでBA、CFAがそれぞれ約30%の論文をとりあげている。CA、BAは国内の協力者が抄録を送るシステムになっており、国内における協力体制の整備充実がはかられることが望まれる。

CFAが、水産学関係の二次資料の中では比較的収録率が良く、BAと並ぶ収録率を示したのに対し、他の水産学専門の二次資料、すなわちCBASFとWFACにおける収録率は非常に悪い。この二つはいずれもFAOの出版物であり、国連の食糧・農業担当の機関の出版物としては問題である。世界の食糧供給源として水産資源は重要なものの一つである。FAOとしてはもっと規模の大きい、充実した出版物を出すよう努力してもらいたい。CBASFに代わって1972年から出される

Aquatic Sciences and Fisheries Abstracts の発展に期待したい。

雑誌の刊行機関のグループ別にみると、最も収録状況が良かったのは学会誌である。これは水産学関係の数少ない重要な専門誌である、「日本水産学会誌」の論文の収録状況が良く、どの二次資料にも収録されていたことによる。

大学関係の雑誌論文は一応主な二次資料には収録されていたが、配布方法の問題など検討の余地を残す。

国立および公立試験研究機関の雑誌論文についてみると、外国の二次資料における収録率が悪い。また国内のものであるにもかかわらず、日本化学総覧における収録状況が良くない。とくに、国会図書館は、関係者の協力を得て、入手のむずかしいこれらの出版物の収集に、さらに一層の努力をしてもraitたい。

なお、この調査では、創刊されて間もないため、用いることができなかった「日本農学文献記事索引」は、とくに current awareness 用の二次資料として、日本の文献を探索する際にかなり役だつものと思われる。

機械化が進み、二次資料の形態そのものが変わりつつある今日、まだまだ国内の体制は遅れており、研究者の貴重な研究成果が、国内はもちろん、広く世界に、すみやかに伝えられるよう、整備の充実を強く要望したい。

この報告は、慶応義塾大学文学部図書館情報学科の47年度卒業論文の一部である。作成にあたって調査の初めから懇篤なるご指導をいただいた東京大学農学部図書館の佐々木敏雄氏に、深く感謝の意を表する。